

としまグリーンキッズプロジェクト 2019 報告

高橋 敬子

1. としまグリーンキッズプロジェクトとは

豊島区池袋西口地区を住み続けたいまちをすることを旨として、立教大学 ESD 研究所、西池袋南町会、マテックス（株）、NPO 法人としま NPO 推進協議会、NPO 法人ゼファー池袋まちづくり、NPO 風土-Kazetsuchi-等の地域の団体が集い、2014 年 3 月に「としまちプロジェクト運営協議会（会長阿部治）」を設立した。同協議会では、西池袋の持続可能な未来像として、①人と人をつなぐ、②人と自然をつなぐ、③次世代に残したい宝を守り伝える、④新しいまちの価値づくりという 4 つを打ち立てた。そして、上記の未来像の達成に必要な活動として、2017 年に豊島区の小学生を対象とした環境学習講座（としまグリーンキッズプロジェクト）を開始した。

初年度は、池袋第三小学校子どもスキップ、みらい館大明、立教大学で、池袋に生息する生きものや植物を観察してスケッチし、地図をつくり、動画をつくるという 3 日間の連続講座を開催した。また、3 日間で学んだことを、作成した地図や動画を使い、地域の方に発表するコミュニティカフェを開催した。2 年目は、池袋の森を考える会と池袋平和通り商店街振興組合とが管理・保護をしている池袋駅北口にある「池袋の森」で生きものの観察を行い、スケッチや生きものの特徴を見る方法を学び、図鑑をつくる講座を開催した。

3 年目となる 2019 年は、豊島区の芸術文化施設である東京芸術劇場との協働企画（7 月 6 日）と、池袋駅東西を結ぶ地下道ウイロードをアートの方で再生する活動に取り組んできた芸術作家、植



図1 としまグリーンキッズプロジェクト 2017 チラシ



図2 としまグリーンキッズプロジェクト 2018 チラシ

田志保氏との協働企画(7月7日)を考え、豊島の自然とアートの視点を結び付けることをテーマに実施した。

2. プロジェクトの目的

本プロジェクトは、西池袋における持続可能な地域像の一つである、「人と自然をつなぐまち」の実現に向け、豊島区に住む子どもたちに対して、地域の自然を見る目(生物多様性・外来種等、総合的に自然を見る視点)を養い、地域の自然の現状から課題を発見し、課題の解決方法を探り、地域の人たちに発信していく力の育成を目的としている。

3. プログラムのデザインと特徴

本プロジェクトでは、①知る・気づく・学ぶ、②調べる、③まとめる、④発信するという4つの学びの段階を取り入れた教育プログラムをデザインしており、同地域で活動する協議会メンバーが持つ地域資源(場所、モノ、人等)の情報を基に、豊島区ならではの学習内容を取り入れている。

としま政策データブック 2018(豊島区, 2018)によると、豊島区は人口密度が全国1位(22,068人/k㎡)であり、緑被率は12.9%と東京23区内でも低い。そのため、子どもたちは池袋駅周辺で緑地を見る機会は非常に少ないのが現状である。そのような現状を打開するため、自然を守る、増やす、つくる活動を地元の団体や個人が行っている。本プロジェクトでは、そのような場所や人に焦点をあてて、子どもたちが「都会ならではの自然」を感じ、池袋という地域に愛着を持ってもらうことを目指している。

4. グリーンキッズプロジェクト 2019 の実施概要

2019年度のグリーンキッズプロジェクトは、7月6日(土)、7月7日(日)の2日間、親子を対象に実施した。環境や自然に興味のない層に来てもらうために、「豊島区のアート」と「自然」を結び付けた2つの内容を考えた。

6日(土)は、豊島区で自然を増やす活動をしているNPO法人ゼファー池袋まちづくりの石森宏氏の案内で、池袋駅西口周辺の緑化の様子を見学した後、東京芸術劇場の屋上で試験的に実施してきた屋上緑化を体験してもらった。屋上では、(公財)日本生態系協会の吉田峰規氏と



図3 としまグリーンキッズプロジェクト 2019 チラシ

一緒に、そこに生えている植物を観察し、生きものを捕まえて観察することによって、どのような生きものが屋上にいるのか、どこから来たのか等を一緒に考えた。その後、屋上で育てたトマトやオクラを収穫して味わった。

子どもたちだけではなく、参加した大人たちも、「都会のど真ん中にこれほどの自然があるなんて驚いた」という感想を述べていた。

その後、東京芸術劇場副館長の高萩宏氏と、舞台監督の白神久吉氏より、芸術劇場の裏側ツアーとして、劇場の中や舞台を巡るミニツアーが開催された。普段は入ることのできない舞台の上へ上がった子どもたちからは、「舞台の上から見るとこんな風に見えるんだ!」という驚きの声が聞かれ、舞台の上で跳ねたり、客席に座ってみたりしながら楽しんでいる様子が見られた。

イベント終了後のアンケートによると、子どもたちからは、「舞台にあがれて楽しかった」、「いつも見られない場所が見られたり、屋上で虫や野菜をとったりして楽しかった」という感想の他、「豊島には何種類ぐらいの生きものがいるのか知りたい」、「どういう植物が環境に良いか知りたい」という質問も書かれており、本プログラムにより、豊島区の生きものに関する興味がひきだされたと考えられる。また、保護者からは、「私が子どもの頃の池袋はみどりがほとんどなく、殺伐とした少し怖い街というイメージだったが、久しぶりに西口を訪ねて、みどりが整備されていることに驚いた」、「池袋の緑が増えていくのはこの先の未来にとっても大切です」、「駅前の緑化、今度からはもっと注目します。芸術劇場のバックヤードに入れて、大人が楽しかった。私自身が演劇を昔やっていたり、今も好きで観に行ったりするので、大人も満足だった」等の感想をもらっている。

また、「野菜やイネ等の収穫も体験させたい」、「一年を通して子どもたちに緑の手入れをさせたい」、「東京は自然も少なく、子どもたちは生きものをつかまえるのではなく買うものだと思っている。自然や虫・花、野菜等、触れ合う機会をお願いしたい」等、都会の子どもたちへのさらなる自然体験の機会を求めている保護者の声も多数聞かれた。



図4 屋上で生きものを見つける子どもたち



図5 芸術劇場内でのミニツアーの様子

7日(日)は、芸術作家の植田志保氏と一緒に、色を使ってとしまの自然を表現するイベントを実施した。7月7日に実施することもあり、「天の川」というテーマを設定し、大きな白い布をキャンバスにして、自分たちが感じた豊島の自然を思い思いに色で表現することを目指した。

最初に、植田志保氏の「自然の中で、自分たちがステキだと思うものを見つけましょう」という話から、立教大学内の自然を散策し、自分たちが「ステキだと思うもの」、「きれいだと思うもの」、「驚いたもの」等を見つけていった。通常の実験観察であれば、動植物の名前を尋ねる子どもたちも、今回のイベントでは、雨粒が乗った葉っぱを見つけ、「ダイヤモンドみたい！キラキラしてきれい」といって、他の子どもに見せる場面や、きれいな花を見つけ、「この花きれいだね、すてきだね」といって他の子や大人に見せるという場面が見られ、感性を大切に自然観察の機会になったように思えた。自然散策から戻った子どもたちは、自分たちが見て、感じた自然を思い浮かべ、真っ白なキャンバスの上に、それぞれの色を使って表現し始めた。最初は、恐る恐る色を筆につけて描いていた子どもたちも、植田氏が手や足に色を付けてダイナミックに表現するのを見て、次第に手足に絵の具をつけて、どんどん大胆に表現するようになっていった。自分の中で知らず知らずのうちに設定してしまった枠を超え、自分自身の感情を自由に表現するようになっていったことに対して、周囲にいる大人や保護者からも驚きの声が聞かれた。



図6 としまグリーンキッズプロジェクト2019 チラシ



図7 シロツメクサの雨粒を観察する子どもたち



図8 思い思いの色で自然を表現する子どもたち

子どもたちが自由に表現できる空間をつくるために、汚れてもいい真っ白のTシャツを準備したり、床にシートを何重にも重ねて貼ったり等、事前の準備に様々な工夫は必要だったが、開放的になっていく子どもたちの姿を見て、その効果を実感した。

終了後に配ったおやつは、豊島区に昔からあるせんべい屋のおせんべいを食べてもらう等、豊島区ならではの素材を盛り込んだイベントが出来上がったように思う。

アンケートからは、「どんな生きものがいるのか知りたい」、「どんな自然があるかもっと知りたい」という、自然に対する新たな好奇心が芽生えていると感じられる感想が子どもたちからは聞かれた。また、保護者からは、「自然さがしに加え、絵の具でダイナミックな作品をつくれてよい経験になった」、「普段なかなか子どもと植物の話をする機会がないので、新鮮で楽しかった。天の川をつくろうは、子どもの自由さ大胆さに圧倒された」、「ここまで絵の具を思いっきり浴びて楽しませることは家でさせてあげられないので、貴重な機会だった」等の声が聞かれた。これらの感想から、本イベントで目的とした、「豊島の自然を感じ、子どもたちが感じたことを自由に表現する」ことは達成できたと考えられる。

5. 今後の課題

としまグリーンキッズプロジェクト 2019 では、豊島のアートと自然を結び付けることを目指して実施した。当日の子どもたちの様子や、保護者からのアンケートの記述内容を見ると、本プロジェクトの目的はある程度達成できたと考えられる。アートと自然を融合した都市ならではの環境教育の可能性が生まれたのではないかといえる。

アート以外の様々な豊島区の魅力と自然とを融合した学習内容の考案や、本プロジェクトの継続的な実施が今後の課題である。

(たかはし・けいこ 立教大学社会学部／ESD 研究所 教育研究コーディネーター)